

多職種で取り組む誤嚥・窒息予防 ー摂食嚥下障害看護認定看護師として考える安全な食支援ー

浅子久美子[†]第77回国立病院総合医学会
2023年10月20日 於 広島

IRYO Vol. 79 No. 1 (20-23) 2025

要旨

国立病院機構東京医療センターは、高度急性期病院として、重症かつ緊急に治療が必要な患者に対し、専門的な医療を提供する役割がある。高度急性期病院では、平均在院日数の短縮化が進んでいるが、入院患者の高齢化に伴い、誤嚥性肺炎で入院する患者、または入院中に誤嚥性肺炎を発症する患者の入院期間が延伸する傾向にある。誤嚥性肺炎の診断後、患者は禁食となり、抗菌薬の治療が開始され、炎症反応が落ち着いた後、嚥下リハビリと食事摂取が開始される。誤嚥性肺炎発症にはさまざまな要因があるが、入院期間が延伸する理由の一つとして、嚥下機能の低下がある。入院患者の顕在する症状の他に筋力低下や認知機能の低下など加齢にともなう身体的な変化がみられ、嚥下機能に大きな影響を与える。治療により一時的に誤嚥性肺炎が改善しても、禁食期間が長くなるほど嚥下機能は低下し、嚥下機能低下により誤嚥が繰り返されることが多い。とくに予備能力の低い高齢者にとって、筋力低下や認知機能の低下は嚥下障害の大きなリスク因子リスクであり、嚥下障害による「誤嚥」「窒息」の発生リスクも高くなる。過去5年間における東京医療センターの食事に関連したインシデント・アクシデントを調査すると、ほぼ報告はあがっていなかった。しかし、急変により加療が必要となった事例を振り返ると、「誤嚥」「窒息」と考えられる事例は少なくない。患者にとって食事は治療の一環であると共に楽しみや癒しでもあり、QOLに大きく関わる。摂食嚥下障害看護認定看護師として、多職種とともに組織横断的に行ってきた「誤嚥」や「窒息」を予防する「安全な食支援」の活動について報告する。

キーワード 誤嚥, 窒息, 安全な食支援, 摂食嚥下障害看護認定看護師

はじめに

内閣府が公表した2022年版高齢社会白書では、日本の65歳以上人口は3,621万人となり、高齢化率は28.9%と報告されている。また、WHOが発表した

2023年版の世界保健統計では、日本の平均寿命は、男性が81.5歳、女性が86.9歳で、諸外国の中でも長寿国となっている。これは、わが国の医療技術の進歩、生活環境の改善、食生活・栄養状態の改善、福祉の充実によるものと考えるが、一方で健康寿命は

国立病院機構東京医療センター 看護部 病床管理室 [†]看護師

著者連絡先：浅子久美子 国立病院機構東京医療センター 看護部 病床管理室

〒152-8902 東京都目黒区東が丘2丁目5-1

e-mail: asako.kumiko.hb@mail.hosp.go.jp

(2024年4月8日受付 2024年8月2日受理)

Prevention of Aspiration and Choking Addressed by Multiple Professions: Safe Eating Support from the Perspective of a Certified Nurse Specializing in Dysphagia Nursing

Kumiko Asako NHO Tokyo Medical Center

(Received Apr. 8, 2024, Accepted Aug. 2, 2024)

Key Words: aspiration, choking, Safe eating support, certified nurse specializing in dysphagia care